

177

こんにちは。塾長の大井です。

3期生受験戦記41回です。

今週ついに受験を迎える4期生へのエールを込めてこの文章を記しています。

出陣式が終わって、みんな身じろぎもしませんでした。そこに生まれた得も言われぬ一体感の中で、これまでの歴史とTOPで学んできたことの意味に静かに想いを馳せているようでした。

しばらくの間、去りゆかない余韻に深く身を沈ませた後で、一人ひとりと言葉を交わし、ラストを送り出しました。

そこで不思議な出来事がありました。最後に出たAさんが、何か確信に満ちたような顔で語り出したのです。

「先生、私は明日の雙葉受かるでしょう。2日の豊島岡は難しいですが、3日の大妻も4日の浦和明の星も受かると思います。」

私と田宮は顔を見合わせました。答案を作る前から、そんな予告めいたことを言う生徒は今まで一人もいなかったからです。

Aさんが帰って、田宮が呻くように漏らしました。

「A、すごいこと言ってたな。なんか分かるのかな？」

「どうだろ。あれだけやった自負が、何かをはっきりと確信させるのかもな。」

私も不思議な感に打たれながら答えました。

翌日。2月1日。3期生が夢を叶える日がやって来ました。

私は開成へ、田宮は雙葉に激励に向かいました。

開成では絶好のポジションを確保できました。

憧れ続けたこの学校がどうかMの母校になるように。

そう願いながらMくんの到着を待ちます。

Mくんが来ました。ぐっと血が熱くなります。

Mくんも私に気づき、駆け寄ってきました。程よい緊張を滲ませた締まった表情でした。

「いい顔してるな！眠れた？」

「はい！」

そしてMくんは言いました。

「全部出し切ってきます。3年間の全部を開成にぶつけてきます！」

「おう！想いのありったけを表現しておいで。必ず届くから。」

そして、あらゆる瞬間を共にしてきた愛弟子と固く握手を交わしました。

気負い過ぎず、場に吞まれることもなく、想いの伝わってくる握手でした。人はこんな時、すばらしい結果が出せるものです。

万感の想いでその背中にエールを送ります。

（M、いけ。絶対勝ってこい！！）

そして、賽は投げられました。

全てを出し切れるように。

想いが届くように。

何度も祈りながら、試験時間を過ぎました。

そして午後になり、子どもたちが帰って来ました。

沈痛な表情の子は誰もいません。それぞれの感想や手応えもそう悪いものではありませんでした。

ただ、出来は答案を見なければ分かりません。彼らに再現答案を作らせ、明日の試験に備えました。

しかし・・・。

まずは雙葉の2人の答案を採点した田宮が、首を振りながらキツパリ言いました。

「全然戦えてない。」

恐れていることが起こりました。算数で2人とも取れていなかったのです。それは得意なはずの国語にも言えました。崩れてはいませんでした。崩れてはいませんが、いつものように大きく稼ぐ答案には程遠いものでした。雙葉組2人は、率直に言って「待てない答案」でした。つまり、もう合格発表を待つまでもない結果ということです。

こうなったら明日以降に賭けるしかありません。私たちは2人の時間をただ明日の対策に費やしました。

一方のMくんの採点です。

田宮が食い入るような表情で採点します。

結果理系は、算数理科併せてギリギリ死守したというものでした。

「とはいえ、合格者の手応えじゃない。本当にボーダーラインだと思う。文系勝負だね。」

(そうだったか。)

ただそれはどこかで予感したものでありました。

社会は合否の瀬戸際の問題を一問落としては一問取り返す。そんな一進一退が続き、何とか死守していました。

3科でボーダー。

もう国語勝負は明白でした。Mくんが一番苦勞し、一番向き合った科目です。

一問ごとに、汗が滲み、うめき声が漏れます。

「あああっ！！」

気づけば、私は一際大きな声を上げていました。

「どうした？！ダメか？！」田宮が覗き込みます。

「終わった・・・。」

とんでもない誤答でした。

「・・・いや、ちがう！！これでいい！！」

Mくんは私が何度も教えた動きで、ちゃんと大脈を追っていました。

そうやって何度も息をのみながら、ラストまでつけました。

「大井先生、どう？？待てる？！」

切迫した表情の田宮に私は言いました。

「田宮先生、待てる。本当に国語勝負なら、アイツは受かる。」

Mくんの答えは、やり切っていました。出し切っていました。

これでダメなら、私の責任です。

でももしも歴史が問われるなら、その答えは全てここにありました。

2月2日。

女子2人は豊島岡、白百合に戦いに行きました。

Mくんは神奈川御三家筆頭の聖光を受験しました。

私たちは梯子して女子の両校の応援に駆けつけました。

そして、この日、女子の結果が次々に開示されます。

予想していたとはいえ、雙葉の敗戦は堪えました。Aさんのあの合格の予言は脆くも崩れ去ったのです。

さらに、女子2人は当日発表の豊島岡、白百合を相次いで落としました。

こんなに苦しい受験は初めてでした。

そして2月3日。開成合格発表当日。

午前、まるで連鎖するかのよう、悲劇はつづきました。まず合格は堅いと目していたMくんの聖光がまさかの不合格だったのです。

最悪の流れでした。これで開成もやられたら、もうTOPは畳まなけ

ればならない。本当にそこまで考えました。

12時。合格発表の1時間前、私は食事も喉を通らず、赤飯おにぎりだけを買って、TOPに向かいました。

そして田宮とTOPで机に向かいました。

「大井先生、本当にいよいよだよ！！」

田宮の声も上ずっています。

「待てる？算数死守はしてる。でもいつもの合格者の手応えとは違うんだよなあ……。」

「いや、だったら国語で来るよ。あの答案が全てだ。」

そんなやりとりを何度も何度も繰り返しながら、受話器に手をかけます。

10分前、5分前、心臓が早鐘のように胸を叩きます。大げさではなく、もう息をするのも苦しいほどです。

「メールかなあ、電話かなあ！どっちにしても絶対一緒に見よう！」

「当然だろ。」私がそう答えた時でした。

2人の間に置いていた私の携帯が震え、メッセージが届きました。

「ああああっ、Mだ！！大井先生、結果見た？？見た？？」

「見てない、じゃあいくぞ？、いくぞ！！——来い！！！」

【開成に合格 「間違いなく、合格しました。」】

「やったああああああああああ！！！！」

「うおおお、大井先生やったよおおおおおお！！！！」

泣きました。

田宮と抱き合って、何度も肩を叩き合って泣きじゃくりました。

TOP 設立から3年、Mくんの夢が、私と田宮の夢が叶いました。

2人でゼロから作り上げ、全てを注いで掴んだ、たった一つの合格。

月並みでもなんでもいい。それは、人生で一番幸せな合格の瞬間で

した。

(最終回につづく)

2018年1月29日

大井雄之